

英語冠詞類の考察（場の中の対象指示という観点から）

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2010年9月30日受付、2010年11月9日受理)

概要

話者が話をしているとき、その話の内容が形成されている（状況を表わす思考上の）文脈の場というものは、その領域を正確に知ることは無理である。また、明確な領域が存在していることすら不明である。だからと言って、そのことは場という考えを放棄する理由にはならない。なぜなら、場とその中の対象への指示の仕方が冠詞類の理解に非常に有効であることがこの考察から分かったからである。例えば、ある名詞句の指示する対象が場の中に存在するかどうか、ということは場の領域が明確でなくても容易に判断でき、それだけでも英語冠詞類の振る舞いを理解するのに重要な判断基準であることがこの考察で明らかになった。

〔1〕分析ツール（視点）の抽出（文脈場と指示性）

筆者がこれまで英語の冠詞類を理解しようとしてきた中で、文脈の中身が実現されていると考えられる頭の中に形成された場と其中での対象への指示の仕方が冠詞類を理解するのに非常に重要ではないかと感じてきた。この場というものが冠詞類の振る舞いをどれほど説明するものか、それをここで見ることにする。言い換えれば、ここでの目的は、冠詞類がどのような条件下でユニークに決定されるのか、その原理を場というものとその中の対象への指示の仕方という面から探ることである。

＜冠詞類の使い分け＞

次の冠詞の対比的使用はすでに良く知られている。（例文については、そのほとんどをジーニアス英和大辞典から引用させて頂いたことをここに断わるものであり、一々述べることを省略させて頂くことにする。）

(1) He is playing the piano now.

(2) He is playing a piano in the hall now.

(1)は家庭の中で、一家に一台のピアノを弾いている状況を述べていると考えられる。(2)はいつもと違った環境の下でピアノを弾いている状況と考えられる。同じ「ピアノを弾いている」という行為を述べる際にも、ピアノへの言及の仕方が異なるが、それが冠詞の違いとして現れるということである。発話者が発話する際に念頭に置いていると思われる（仮定される）状況が(1)と(2)では異なるわけで、それらの状況を（主に）空間的に捉えたものをここでは（文脈の）場と呼ぶことにする。場の中の対象であるピアノが異なった冠詞を伴った名詞により指示されているが、それは「冠詞類＋名詞」が指示する対象の捉え方に違いがあるため、そのことが冠詞類の違いとして現れる、と言える。

(2)での a piano は、通常、「不特定の一台である」ことを示す。つまり、he との所有関係に言及せず、単なる1つのピアノであるという話者の認識（あるいは、それだけの情報提示にしたいという気持ち）がこの不定冠詞によって表されている。それでは、次の文はどうか。

(3) This is a piano. （これはピアノです）

この文を場の中でみると、this は指示代名詞であり、場の中の対象を指示している。するとここでの a piano はどのように捉えられるのか。これは this の説明としてだけ使われているものであり、場の中の対象を指示しているのではなく、this についての説明（他のものではなくピアノであること）を示しているだけである。つまり、a piano は場の中の対象を直接指示してはおらず、単に this を説明しているだけである。この(3)に対し、次の文では this と the piano が場の中の2つの対象であって、それらの関係が述べられていることが分かる。

(4) This is the piano. (これがそのピアノです)

この文においては、場の中にある2つの対象 this と the piano が同定の関係であることを述べている。

以上、例文を見比べることにより、冠詞類の振る舞いを理解するのに場(状況)と場の中の対象への言及、指示の仕方がどうであるか、ということが大きく意味を持っていることが分かる。ここでは場と場の中の対象への指示というこの2つを分析ツール(視点)として設定し、それを基に冠詞類の様々な振る舞いを見ていくことにする。さらに次の文についてはどうであろうか。

(5) He is my friend.

この文では、my friend に、当該の場の中の対象に対する指示性があるとみる同定の理解と、それはなく this の説明であるとする場合の2通りの解釈が可能なのも見えてくる。

以上から、場とその中への対象の指示の仕方に様々あり、その違いが冠詞類の違いに呼応していることが分かる。以下で、このツールを用いて冠詞類の振る舞いをさらに詳しく見ていくことにする。

〔Ⅱ〕加算と不加算の間の振れ

Petersen は加算名詞と不加算名詞の使い方の違いを示すために次の例を挙げて説明している。

(6) Hope chests of this design are available in a range of sizes and in several types of wood. (p.32: Petersen)(7) When shopping for a new car, size is not the only important consideration. (p.33: Petersen)

前者の sizes が加算名詞、後者の size が不加算名詞の使い方、前者と後者の size の違いを次のように説明している。

前者：「数をつけて表現することもできるいくつかの具体的なサイズを示している名詞である。」

後者：『『大小そのもの』という概念を示す言葉である』

筆者がここで注目するのは、場の中において名詞がその中の対象をどのように指示しているか、ということである。Petersen の説明でこの違いは十分理解できるけれども、場と対象指示の観点から見てみよう。sizes は場の中で指示対象を特定できるものであり、今の場合、規格化されているサイズである。しかるに、後者の size は場の中で指示する対象を探そうとしても探せないことが分かる。a new car のサイズが指示されるように見えるけれども、そのサイズを指示しているとは言えない。a new car を it で受け、加算名詞としての its size を用いた別の文にすれば全体としてほぼ同じ意味になるが、それは元の文とは異なった文である。今の場合、size はあらゆる車を射程に入れた、あるいは車以外のものも含めた漠然とした size の意味で使われているから、場の中の対象として指示することができないのである。この size が所謂、不加算名詞の用法である。以上から、場の中での対象指示性という点に着目すると加算、不加算を明瞭に区別できることが分かる、という結論が得られる。

さらに他の例で、場という枠と、その場の中の対象への指示性ということがどれほど冠詞類の振る舞いを説明できるかを見ることにする。

(8) breakfast と冠詞類

- | | |
|--------------------------------|---|
| a) to eat <u>breakfast</u> | 場の中での具体的指示性は弱
食べる行為自体を無標の形で示すもの、breakfast は物質名詞の扱い |
| b) to eat <u>a breakfast</u> | 場の中での具体的指示性あり(場の中の選択/場の外の選択)
個別的認識、選択的(不特定の)認識
やや特別な事象の記述 |
| c) to eat <u>the breakfast</u> | 場の中で具体的指示性あり
既出であるか、限定されることにより特定の
すでに取り上げられている特定の朝食を指示 |
| d) to eat <u>his breakfast</u> | 場の中で具体的指示性あり
進行中の行為や習慣的行為を示す
場の中の対象間の関係記述になっている |

これらの違いは以下でも個別に詳しく見ることになるが、ここでは、簡単そうに思える breakfast でも、冠詞類の違いにより、このように可算、不加算の両方の使い方があることを示している。このことから、どの名詞であっても、表現したいことに対し冠詞類をどのように利用すべきかが決まり、その結果、加算、不加算などの用法も生じる可能性がある、と見るべきであるとの考えに至る。名詞の本来の意味から、どちらかが

無理な場合もあるとは思われるのであるが、以下に、breakfast に拘らず、それと意味が似ている語の具体的な例文を挙げる。

(9) breakfast（に類似した名詞）の例文

- a) Have you had dinner yet? (行為自体に注目)
- b) I had a modest breakfast of toast and coffee and one egg. (個別的な認識)
- c) The insect ate the peach hollow. (既出対象の指示)
- d) I have my breakfast at seven. (習慣行為)

先の分類にうまく対応していることが分かる。

<対象の多様性、扱いの多様性>（対象の特性と対象の捉え方）

breakfast とは異なる別の語でもう一度冠詞類の役割を見てみよう。

(10) chicken と冠詞類

- a) to eat chicken
- b) to eat some chicken
- c) to eat a chicken, to eat some chickens
- d) to eat his chicken
- e) to eat the chicken

a), d)はひよこと鶏肉の違いがあり、加算、不加算の違いになっている。his には主語の表わす人とは異なる人を表わす場合と、それと同一人物である使い方があり、後者を再帰的な使い方（日本語で「自分の」に対応する場合）と呼ぶことにする。上から順に冠詞類による限定が強くなっている。名詞の持っている意味を中心として、冠詞類との結合で様々な意味が生じるが、冠詞の持っている意味がストレートに出ていると見える場合のほかに、前の his breakfast では、his chicken と異なり、his を持ち出す場合、特殊な意味が生じるが、その理由を後で考察する。

a)の裸物質名詞は不加算の扱いであり、それに物質名詞としての鶏肉が呼応し、それらが整合した表現となっている。この場合は漠然とした捉え方で chicken の量とかその他の情報は一切出ない。その意味で場の中への chicken の指示性については弱いと言える。少しでもその指示性を強くしたものが、例えば修飾語句の付いた b)の形である、と見ることができる。

名詞はそれぞれ、その基本の意味で加算と不加算に分けられようが、これは名詞が指示する対象の特性から来るものと言える。そして各名詞は、その特性に応じ、次のような扱い方をすることが無標と言える。

(A) 加算名詞： 個別的、単位的な認識が無標

個別的、単位的な扱いが無標（加算的扱い）

(B) 不加算名詞： 限定のない全体的な認識が無標

（漠然とした）限定がない扱いが無標（不加算的扱い）

しかしながら、本来、加算的な名詞でも総称用法や無冠詞の用法により不加算的扱いがなされることがあり、不加算名詞としての一面ものぞかせる。他方、本来、不加算的な名詞でも計量単位など修飾語句や冠詞類との結合により加算的に扱われることがある。上の chicken の場合、語源としては「ひよこ」、「小さな雄鶏」で、加算名詞の意味を原義とすれば、上の a), b)などは冠詞類を付けないことにより不加算の扱いが可能になっている、と言えるだろう。

また、元々加算名詞でも、それを含む成句全体が機能的に働くためか、冠詞類が現れないことに筆者は気づいていたが、それが単に成句だから特殊な形で構わないということではなく、場の中の対象への指示性がない（したがって成句が全体として機能的に働くだけである）と考えることにより、冠詞類が成句に現れにくい理由であり、このことはこの考察の1つの成果である。たとえば、go to school（学校に勉強しに行く）の school は場の中で具体的な学校を指示しているのではなく漠然とした不加算の扱い（学校での勉強）と考えられ、そのことにより成句全体が機能的になると考えられる。

新英語学辞典は、次の例文を挙げ、

(11) Lead is heavier than iron.

(12) Art is long, life is short.

これらの文中の名詞が総称用法であると説明している(p.480)。総称と呼ぶには筆者には少し抵抗があるが、

それらは特定のものを指示しているわけではないことが明らかで、それらが裸不加算名詞の扱いになっていることと整合していることが分かる。こういった物質名詞でもそれを具象化させるのが冠詞類の働きの1つと理解できる。

(13) some lead, an iron (アイロン)

これらがその例である。

本来、加算的である名詞についても、次の例のように冠詞類が付かない場合、名詞が不加算的な扱いを受けていると解釈できる。この場合、bird や man が場の中で対象指示性を持たないことと辻褄が合っていると見える。

(14) a bird-finding tour

(15) It's a man hunt.

このとき、bird や man は無冠詞用法で漠然とした捉え方になっている。このような名詞句の中にある無冠詞の名詞は名詞句の中でそれ本来の役割を果たしていると言える。

<場の中の対象への指示性>

任意性：

不定冠詞による不特定性（選択性）の表示に関して、どのような選択肢の中の選択かということで問題が生じる場合がある。場の中に複数の同一（種の）要素があり、その中の1つという選択なのか、当該の場から離れてより大きな枠組みの中での選択なのか、そのどちらかという判断が必要な場合がある。後者は種属全体を枠とするカテゴリー集合の中での選択なのか、ということである。また、別の紛らわしさとしては、It's a chicken. では、it が動物で、それが鶏ということを表しているとも、it が肉片で、a chicken は場から離れて、肉のカテゴリー集合の中での chicken という種を指定する説明文とも見ることもでき、そのどちらかということである。その他の状況もいろいろと考えることができるだろう。つまり、不定冠詞による不特定性に関して、選択肢の全体集合を何と見るかで解釈が変わってくることがある、ということである。筆者自身、この経験を持っている。実はこの考察は、その時の経験がきっかけとなっている。

個別性：

ジーニアス英和大辞典には冠詞 a の見出しのもとで次の例文が挙げられている。

- (16) Give me a coffee, please. (コーヒーを一杯ください)
- (17) I'll have a mineral water, please. (ミネラルウォーターをお願いします)
- (18) These slums are a disgrace to the city. (このようなスラム街は市の恥だ)
- (19) He has a knowledge of biology. (彼には生物学の知識が多少ある)
- (20) There was a silence. (しばしの沈黙があった)

これらの例は、元々不加算の名詞が加算的に捉えられ、加算名詞の扱いになっていることを示している。これらの名詞は、不定冠詞 a が用いられていることから、裸不加算名詞の漠然とした全体的認識に比べ、個別的、単位的認知が作用していることを示すものであり、また、a+名詞が指示する対象への指示性が裸名詞の場合より高くなっていることも分かる（限定が高まっているので）。言い換えれば、冠詞類の付加による可算化（個別化）への振れは具象化を高めることになる、ということを示している。

裸名詞の場合：

裸名詞は、加算、不加算に係わらず対象指示ということに関して具象性に乏しい、即ち具体的な対象を指示しているとは考え難いということである。一般に、名詞は冠詞類と結合することにより、指示する対象の具象性を増すことが上で分かった。このことは加算名詞に対し言われてきたことであろうが、抽象名詞、物質名詞などの不加算名詞に対しても言えることに、この考察の中で筆者自身気づくことになった。別の言い方をすると、場の中の対象への指示という視点から裸物質名詞を見ると、それは可算名詞の不定冠詞+名詞（そして裸複数形）の形に似ていると言える。指示範囲が漠然としていることが特徴的で、どこの部分が指定されていないということで、このことは裸物質名詞が場の中の具体的対象を直接指示しているのではないことを必然的に意味する。

また、裸物質名詞は単位的な捉え方が原則できない点が加算名詞と異なる点であるが、指示が全体的かつ不特定であることから、それは加算名詞の無冠詞用法と共通していると言える。このことに筆者は少し驚かされた。

不加算名詞は、無冠詞では当該の場に縛られず、量的、時間的、空間的な意識が働かなかったり、変化したり増減したりする意識を持ち難い形の対象の捉え方であると再度強調しておきたい。

〔Ⅲ〕所有代名詞の場から見た特徴

＜所有代名詞の特定性＞

場の中に所有代名詞＋名詞が指示するものが1つしかない場合、たとえば he に対してその人の頭である his head の場合、選択的意識は全く生じ得ない。このような再帰的な所有関係があると考えられれば、定冠詞 the でもよさそうであるが、こういう場合、英語では所有代名詞が使われる。しかし、身体以外では、場の中に該当する対象が1つしかない場合、所有代名詞と定冠詞の使用が競合することになる。この場合、次のような微妙な使い分けも生じさせている。

(21) she put it her microwave to dry it off (p.44: Petersen)

(22) she put it in the freezer to cool it off (p.45: Petersen)

Petersen はこの違いを次のように説明している。

なぜ microwave oven の場合は her microwave というのに、冷蔵庫の場合は her ではなく、the freezer というかは、純然たる意識の問題である。具体的にいうと、冷蔵庫というものは、どの家庭でもあるというふう意識されるが、電子レンジはまだそこまで普及していない。その冷蔵庫との意識の違いを her と the の使い分けで表現する。Her microwave の her の単なる所有関係に対して、the freezer の the は

The freezer that is the expected part of any home (i.e. that it is normal for any person to have)

という意味を与える。(pp.44-45: Petersen)

しかし、この例のように、該当する対象が場の中に1つしかない場合、所有代名詞は定冠詞に近い強い特定性を持つことになり、定冠詞のように働いていると言えるが、後で見ると場の中への話者による導入（紹介）になっている場合があり、このときには所有が必ずしも当然とは言えない対象であることを表わしている。面白いことは、定冠詞による特定の指示は、所有関係がある場合でも、その表出が犠牲になっているということ。これは所有関係が表面に出てこないだけであり、言語があらゆる情報を表現に盛り込むのではないことを示している。この場合、不定冠詞による不特定指示と対局をなしていると言える。他方、所有代名詞による特定の指示のほうは、所有から来るものであり、それ故、先ほど述べたように状況に依存する意味を持つことがある。これと不定冠詞による不特定の指示の類似性については次で見ることになる。

一言でまとめれば、所有代名詞は所有関係に着目することでの特定性であり、その点にスポットライトを当てたことに起因する談話的意味が生じることになる、と言える。

＜所有代名詞の不特定性＞ （所有代名詞＋名詞に選択性がある場合）

所有代名詞は文字通り（広義）所有関係を示すだけで、場の中の対象指示がユニークに決定されない場合がある。それは、所有代名詞＋単数名詞で表わされる対象が場の中で複数存在する場合であり、その中で単数指示であることから来る不特定性である。このことも冠詞類が複雑であると感じる原因の1つになっていると考えられる。所有代名詞による指示が2つ以上の対象を指示可能であるのは次のような場合である。

(23) Please raise your hand if you have any question(s).

この場合、指示可能な対象は左手と右手の2つあり、そのどちらでもよいと理解できる。辞書を見ると次のような例もある。

(A) put a (one's) finger to one's lips= have (lay) a (one's) finger on one's lips

所有代名詞+hand (finger)では、これらの例で推測できると思われるが、hands (fingers)を場の中へ前もって紹介する文は必ずしも必要としない。それらの対象は人に対して当然備わっていることが常識的に分るからであろうが、指示対象が2つ（以上）あり、そして単数の指示であるから、不特定性を有することになる。そして、英語はその不特定性に許容する言語であると言える。（日本語も当然そうである。）ところが、このことに関し、次の事実も存在する。それは指示可能な対象の全体が把握できない状況では様子が異なることを示すものである。

(24) This actually happened to a Chicago woman, a friend of my mother. One day her cat came in out of the rain all wet, so she put it in her microwave to dry it off. The cat exploded and the door flew open, hitting her in the face and breaking her jaw. ... (p.43: Petersen)

Petersen はこれについて次のように説明している。

英語では、いきなり“her cat”で紹介した場合、それは her one and only cat という意味になる。それは、いわば上述の「は」と「が」の「段階」が二つともこの表現に入っているからである。つまり、“her cat ……”という言い方は、ここで「彼女のところには、猫が一匹いる。その猫は……」という意味になる。(p.46: Petersen)

このことを踏まえると、次のようにまとめられる。

常識的にあるいは前もって全体集合が把握できるときには、a finger of hers や one of her fingers の意味で her finger を使うことができる。把握できないときは、即ち存在自体が不明のときなどには、所有代名詞＋名詞の単数形(her cat)は自動的に1つしか存在しないということを主張する。

her cat の例では、彼女の飼っている猫の全体集合に関する情報が事前に提供されていないので一匹しかいないと理解されることになる。この点での厳密さがどの程度かは、調査が必要であると感じている。(ただ、これは日本語でも文体、語用論、談話の領域の事柄としてある程度言えると筆者は考えている。)

所有代名詞が許容する選択性(不特定性)は、一体どう考えればよいのか。話者にはそのような不特定性の意識はないのかも知れない。もしかすれば、指示可能な対象全体をカバーする総称とも考えられそうであるが、動詞として put, cut などとも共起することから、その可能性はないと考えられる。これらの動詞と総称を示す目的語との共起は相入れないように思われるからである。所有代名詞で数を意識しそれを明示したければ、a hand of hers, one of her hands などの表現形式を使うことができる。所有関係があり、しかも指示可能な対象が1つだけであれば、my mother, my head, my tongue のように具体的な対象を指示していて何ら問題は生じない。したがって結論としては、所有代名詞は総称というよりも、「所有という意味で特定のでありながらも不特定な指示を若干許容する」ものと見るのが良さそうに思われる。所有代名詞＋名詞によって指示可能な対象を文脈へ導入する際には、その全体の数が単数か複数かについて判断できなければならない、とすることができる。この要請を満たし、しかも簡潔さを持ち合わせたこの単数形は注意が必要で、そうすると Petersen の例で her cat が文脈に紹介なしに導入されるとすれば、her cat は her one and only cat の意味になることが理解できる。以上から、次の命題が立てられる。

命題：英語は、名詞念を文脈の中へ対象を導入する際、その指示可能な対象の全体が単数か複数かを判断できなければならない。

これは英語の持っている極めて基本的な単数、複数の区別に基づいていると考えられる。この命題から見ると、her cat の例は、この命題を満たすエネルギーの少ない表現方法の1つになっている、ということになる。

このことを場の中の対象への指示という視点から捉え直すと、次の結論に至る。それは、場の中への指示ということであれば、場の中に対象が存在していることに言及しておかなければならないということ。これは Petersen もすでに述べていることであると分かったが、この点から冠詞類を見ると、

定冠詞(the)	…… 指示対象の存在の主張性:弱	指示性:あり
不定冠詞(a)	…… 指示対象の存在の主張性:強	指示性:あり
所有代名詞(her など)	…… 指示対象の存在の主張性:弱	指示性:あり

となる。所有代名詞＋名詞の形である her cat が文脈に初めて現れると、それは、存在表明とそれへの指示が同時に行われているわけである。(これが分かると、Petersen が先の引用で述べていることがやっと分かった次第である。)しかしながら、彼女の飼っている猫が一匹しかいないことは Petersen によって説明できているとは思われない。筆者はそれが談話上の「会話の公理」に類した上の命題から来るものと考えたい。考えてみれば、your hand がどちらの手にも適用可能であるように、この形は所有関係を示しているだけで複数のものを指示することができる。繰り返しになるが、特に明示したければ a hand of yours, one of your hands などの表現手段がある。それを使っていないということで、上の命題の原理から、消極的ながら、彼女の飼っている猫が一匹ということを主張することになる、と推測される。繰り返しになるが、次の文は別物であることを理解しておかなければならない。

(25) He is my friend. (同定文と見ない場合)

この文では、my friend は通常、場の中での対象の存在を主張せず、指示性を持たず、ただ he についての説明をしているだけである。my friend 自体がある対象を場の中に指示しているのではないということ、さっきの her cat とはこの点で決定的に異なっているということである。

所有代名詞の付いた名詞は、場の中のを指示する場合、場の中の対象を取り上げたり、他の対象との

関係を述べるためのものである。そのことは、不定冠詞や定冠詞の付いた名詞が場の中のものを指示する場合と、場の外のカテゴリー集合を指示する場合があるのと異なり、所有代名詞の重要な特徴であると考えられる。

(26) The hijacker pointed a gun at the pilot and told him to land.

この例文では、a gun は彼の持っている gun のはずである。なぜ不定冠詞なのか。

(27) The hijacker pointed his gun at the pilot and told him to land.

でもよさそうである。所有代名詞であれば、上に述べたように場の中にある対象 the hijacker と his gun の間の関係が述べられ、所有関係をやや冷静に述べていると言える。それに対し、a gun は、これも場の中の対象を指示しているが、それが選択指定されていることからやや驚きを伴って捉えられ、そこが焦点化される効果も生じていると考えられる。（しかし、所有関係が分からないとか、それを抑えて表現する場合にも、当然不定冠詞ということになる。）このように理解すると、所有代名詞と不定冠詞の使い分けが次の例に典型的に表れていることが分かる。

(28) He sometimes takes a nap. 一時的、突発的な記述（he と a nap の密接度小）

(29) He always takes his nap at 2:30. 習慣的な状況記述

筆者は、自身の以前の論考で、所有関係が成立しているところでは、所有代名詞を使うことが無標であると結論付けた。これについては、次のように補正する必要が出てきた。不定冠詞 a と所有代名詞との使い分けは、それらが付いた名詞の指示対象の存在が予測可能かどうか、その存在に主張性を持たせるかどうか、ということに左右されるということである。

この章のまとめ：場の中の対象を指示する際に、不定冠詞、定冠詞、所有代名詞の間の違いをそれらの基本の意味で比べてみると次のようになる。

不定冠詞 …… 不特定性（任意性、選択性）

定冠詞 …… 既知参照性、限定参照性

所有代名詞 …… 所有関係

所有代名詞は所有関係が元になっている。したがって、その対象の数は単数のときのほか、複数のときがあり、このことが不特定指示を生み出し、また、所有関係が常識的に認識される場合、状況参照性や既知参照性（定冠詞的）を生じさせることにもなる。そして、her cat が文脈の中に紹介なしに現れると、her cat の指示する対象が全体で1個であることが主張されるが、これは文の文法というより、談話の領域の問題で、複数あることに言及しないことから来る単数ということであると考えられる。

〔IV〕冠詞類の特殊用法

(1) a や the の総称用法

冠詞類の付いた名詞による、所謂総称用法とされるカテゴリー指示は、通常、文脈場の中では具象的ではない。（カテゴリー全体が場の中に納まっているときにはそうではないけれども。）総称用法での対象指示は、場の中の要素を間接的に指示するけれども、場の中のものを直接指示しているとは言えない。そうであれば総称用法になり得ないからである。

第Ⅱ章で述べたように、物質名詞に付く量子子は、単に量を示しているだけでなく、指示対象を具体化（具象化）させる働きを持っていると言える。

(30) A dog is an animal.

(31) A horse is a domestic animal.

これら不定冠詞の総称用法は、これまで全体の中の1つを任意に取り出し、それについて述べることでよりメンバーすべてについて述べることになる、と言われてきた。この場合、不定冠詞＋名詞の指示するものは場の中の具体的対象と考えるほうがよいが、このことに誰も異論はないはずである。そうすると、筆者には、a dog 自体が単数指示というより dog の種全体の指示ではないかと思われる。その点を次に考えてみることにする。

不定冠詞を用いた総称用法は、その名詞で示されるものの属するカテゴリー全体を指示するのではない、ということである。a dog は、総称用法では、文脈の中の対象への指示性を持っていない。それを持っていれば総称にはなり得ないからである。そうすると、a dog は何を指示していると考えられるか。他にも the dog の総称用法があるが、これも同じように場の中に指示対象が見当たらないことが、不定冠詞の総称用法とど

のように異なっているのか。これらの総称用法は、多くの場合、場の中で三段論法の中の大前提に当たるところを述べる役割で使われ、場を離れた説明カテゴリーについてのことであると考えられる。この説明カテゴリーの中味は次のように考えられるのではないか。

様々な(動物の)種からなる集合 ---- その中に a dog species がある

犬の集合 ---- それ全体が the dog species である

つまり、a や the が付いた dog は犬の個体を指示しているのではなく、このように犬のカテゴリーを表わしていると見ることができるのではないか。a や the は種というカテゴリーに付く冠詞と見ることができるのではないか。これは a Nissan が a Nissan car = a car made by Nissan を意味することと通じると思われるが、ただ a Nissan の場合は、これが場の中の指示対象になっているところが異なる点である。

以上の考えからすると、総称用法としての a dog や a tiger などの場合、a による選択性は説明カテゴリーの集合の中からの選択指示と考えることができる。他方、総称用法としての the dog や the owl などは、カテゴリー全体を表している。このように考えれば、総称用法に現れる不定冠詞の不特定性、任意性が理解できるとともに、the の特定性も理解できる。従来、a cat の総称用法は、一匹の任意の cat (代表単数) というものを取り上げ、それについて述べるのが a の任意性であり、任意であることから全体的陳述が生じると考えられてきたと筆者は理解しているが、ここではそれを否定することになる。ここで a cat が述部で単数で続くのはなぜかということに関して、複数概念が主語に来ているが述部は単数で受けるというのは、次の例のようによくある現象であるから、このことは問題ないと言える。

(32) The tiger is in danger of becoming extinct. (主語は複数のだけれども述部は単数)

また、総称用法の a dog の代わりに any dog では文全体で同じ意味になり、このことは従来の考えを支持するものではないかということに対しては、any dog の場合は別の文になっていると考えられる。全体の意味を変えることなく、その中の a を any に変えることができるということだけで、a = any と考えるのは正しいこととは言えない。因みに上の例文(32)について、ジーニアス英和大辞典は次のように説明している、

A tiger ... とするとその種族のうちの任意のどの 1 個にも言及することになるので、この場合は不可この理解の仕方に筆者は疑問を投げかけるものである。

(2) 定冠詞の特殊用法

次のような the の使い方も理解に苦しむものである。

(33) She took me by the hand.

She took my hand. とは意味が異なるのは周知のことである。この場合、the hand は何を指しているのか。the hand は主語 she のものではなく目的語 me のものであり、the hand は my hand となるべきところに定冠詞が使われている特殊な文であると考えられている。定冠詞 the が付いた the hand が指示するものは、もし複数であれば the hands となることから、単数のものを指示していることが分かる。そのため the hand を my hand と解釈しようとするわけである。しかし、なぜ the が用いられるのか。これも場の中の指示という立場からみると、the hand が場の中のものを指示していないのではないと思われる。これを手段からなる補助的カテゴリーの中の要素と考えれば、何とかかなりそうに思えてくる。すると、the hand が場の外の補助カテゴリーの中の要素である the hand ということで、場に依存しない S take O by the hand のパターンが成立しており、その S、O が場の要素で埋められる使い方になっていると考えられる。この場合、take に対し人体のパーツである the hand が指定され (the head や the shoulder ではなく the hand)、それが場の中の事象を修飾している、と見ることができる。場の中で考えれば、the hand がどちらの手かというのが問題になるが、このようなカテゴリーでは the hand は the hand place = the place of hand の形の要素 (“場所を示す”カテゴリー) であり、the は place を修飾している、と見ることができる。その結果、by the hand は全体が機能的な役割を果たしている。by his hand とすれば his hand が場の要素となり、同じような意味になるとしてもこの文とは異なる構造になっていると考えられる。

このように考えれば She took my hand. が場の中の対象である she と my hand の関係を述べている文であるのに対し、She took me by the hand. は場の中の対象 she と me の関係を述べることに集中し、me が目的語という主語に次ぐ卓越した位置を占めていることと連動し、the hand が場の中の対象を直接指示するのではなく、she took me を機能的に修飾していると考え、すべてがうまく整合した形で理解できることが分かる。

＜By the pound＞

次も特殊な定冠詞の用法の文と考えられる。

(34) They sell meat by the pound.

この the pound は「ポンド単位で」の意味で、そう考えれば意味を取る上で全く問題ない。しかし、なぜ定冠詞 the が現れるのか、については疑問が残る。これも the pound が場の中の対象を指示しているのではなく、先に述べた by the hand と全く同じ考え方で分析できると思われる。この場合、補助カテゴリー集合は計量ユニットからなる集合となる。the は the pound unit の the であり、身近なものを指す「あの」の意味を持ち合わせている。そうすると、the pound unit 自体を場の中の対象と見ることもできそうであり、これはやや微妙な点であるが、話者による説明に使用される概念で、やはり、場の中の要素ではないと考えられる。the は場の中のものに対する「あの」ではない。

＜無冠詞総称用法、the による抽象名詞の用法＞

次の (35)、(36) のように、不加算名詞が無冠詞単数で総称的に使われることがある。

(35) Paper is made of wood.

(36) Man is a social animal.

(37) The pen is mightier than the sword.

例えば、paper と wood については、具体的指示性が弱いことから来る漠然とした捉え方が総称的捉え方として利用されていると考えられる。他方、the pen と the sword は場の中のものを直接指示しているのではなく、抽象概念からなる説明カテゴリーの要素と見ればよからう。その要素は、the pen power の形で the power of pen を意味する。pen 自体に定冠詞 the が掛かるのではなく、power に掛かると考えれば、前 2 つの例文の取る加算名詞と同じように分析できる。

＜無冠詞の特殊用法＞

次のような無冠詞の用法は、われわれ日本人にとって特殊であると感じられる。

(38) She is captain of the team.

(39) They elected Lincoln President of the United States.

これらの文は、she や Lincoln を説明している文と考えれば、captain of the team と President of the United States はやはり場の対象を指示しているわけではない。言い換えれば、これらの文は場の中の要素間の関係を述べているのではない。このことが、冠詞が付かなくても不思議でない理由であろう。筆者は、このようなケースを場と関連付けて考えたことはこれまでになく、これまでは不思議なものとしてしか見ていなかった。しかし、場と対象指示ということで考えてみると、この場合、場の中への対象指示はないというのは、極めて明瞭であると実感できる。the captain of the team としても非文ではないと思われるが、その場合は同定文となり、説明文である(38)と意味が異なると考えられる。

参考文献

- 1) ジーニアス英和大辞典 大修館書店 2001 年
- 2) 新英語学辞典 研究社 1982 年
- 3) Mark Petersen 「日本人の英語」 岩波新書 1988 年

On English Determiners from the perspective of Field Reference

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2010; accepted November 9, 2010)

I dealt here with English determiners (the indefinite article, the definite article and possessive pronouns) from the perspective of the field which you are talking about and the way by which you refer to things in the field. Some time nouns are used without any article at all, and other times they are with the indefinite article, the definite article or a possessive pronoun. The difference in the use of these determiners has been found to be clearer when we begin to look from this perspective. One of the biggest issues for me was to clarify in what condition possessive pronouns are used. One of the results from this study is that nouns modified by a possessive pronoun always refer to a thing in the field of talk, which, I have found, can explain why possessive pronouns are avoided in a certain context. Another result is that nouns without any determiner do not refer directly to any real thing in the field. It is found to be crucial whether a noun phrase refers to a thing in the field or to a thing beyond the boundary of the field. I have found this perspective to be a strong judging tool in determining appropriate determiners in a talk.